

身近に感じる日本のおもしろいやり品質

お客さま、こんにちは！お元気ですか？ついこの間新年が始まったと思っていたら、もう7月になってしまいました！（汗）今年もあともう半年しかない、と思うか、まだ半年ある、と思うかでずいぶん精神的な面で違いが出るのですが、私などは、まだあと半年あると思うとのんびりしてしまい、あとになって慌てる性質なので、もう半年しかない、と考えて行動を起こすほうが良いのかもしれない。

さて、話は変わりますが・・・

我が家の朝食はどちらかと言えばパン食が多く、食卓にはジャムのビンが二つ三つ並ぶことがあります。その中にいただき物の海外の某有名店のジャムがあり、これと某国内メーカーのジャムが空になったのでラベルを剥がして洗うために両方のビンをお湯に漬け、ラベルを剥がし始めました。国内メーカーのジャムのラベルはすぐに接着剤も残ることなくキレイに気持ちよく剥がれ、あまり時間がかからずに洗うことが出来ました。ところが海外有名店のジャムのラベルはとにかく取れない！手でこすりながら少しずつ剥がそうとしてもラベルがポロポロになりながら取れるだけで、なかなか剥がせない、剥がれても接着剤が残る。一向に作業が進まず、時間も気になることから途中であきらめてしまいました。（あとで、試しにこれまた某国内メーカーの穂先メンマのビンのラベルを剥がしてみました。剥がれ方に多少違いはあるものの、やはり接着剤も含めキレイに剥がすことができます。）このような作業をしながら、あらためてなぜ国外から日本の製品が求められるのかを実感したような気がしました。

日本のモノづくり現場では「後工程はお客様」という考え方があります。これは「自分の仕事の結果が影響する工程を手掛ける人に喜んで受け取ってもらえるように仕事を進めることで、業務全体の円滑化と生産性の向上をはかる」というものですが、このジャムひとつ取っても、中身の品質は当たり前で、食べ終わったビンのラベルを早くキレイに剥がすことができれば資源ごみとして回収し再生させる工程がスムーズに行えることまでちゃんと考えて作っている。これが日本のおもしろいやり品質であり、世界から高い評価を得ているのでしよう。

なんだかジャムのラベル剥がし作業から日本のモノづくり品質の話へ大きく飛躍してしまいましたが、この「後工程はお客様」という考え方が果たして当社に息づいているかな？と、考えさせられました。暑い季節の到来、体調にご留意されてお元気でお過ごしくださいませ！

日本の野鳥シリーズ

シマアオジを食うなんて

佐藤 弘

2016年春の渡り調査打上げに、その7月上旬メンバー7名にゲスト3名を加えて北海道を訪ねた。さすがに北海道はワイルドだ。浜頓別では朝食前の散歩に宿の庭に出たとたん、オジロワシがシマリスを狩る直前を私が邪魔したと分かった。また、ベニヤ湿原は数日前にヒグマが出て立ち入り禁止になっていた。湿度が低いから空気の透明感がほかと違うし、空が広く、農場や牧場の眺めがどこか外国の風景のようだった。

サロベツ原野ではシマアオジの出現を期待したが、あいにく訪れた時間帯が悪く昼下がりでだったので、シエスタよろしくテキは昼寝の最中だったらしい。「草原のフルート奏者」の美声を聴くのも、胸から腹にかけての鮮やかな黄色を愛でるのも、次の機会までお預けとなった。

だが、現地で聞いた情報では本種の数が最近激減していて、見渡す限りの原野の中で繁殖しているのはわずかにひとつのみという。これでは絶滅寸前ではないか。最盛期にはどれくらいの数だったのか聞き漏らしたが、信じられない思いだった。

本種激減の理由はその翌春日本野鳥の会の会報で知った。越冬地の中国で「米食い鳥の害鳥」として滅茶苦茶に捕獲され、また、「空飛ぶ朝鮮人参」と漢方薬扱いされもてはやされていたという。虎の骨がどうしたサイの角がこうしたと大金をはたいて密猟をさせる、およそ文明人と思えない科学とかけ離れた人たちのやる事だ。今後も目が離せない。

この特集記事を寄せた Simba Chan さんには面識がある。ガビチョウの稿で我々は香港探鳥に行ったと述べたが、その際にWWF 香港が管理する米埔（マイポ）自然保護区を丸一日案内してくれたのが陳さんだった。当時の肩書は助教官、子供らに保護区の自然を案内するのが役目だったようだ。保護区に入るに際し、死のうがケガをしようが賠償請求は一切しないという誓約書の提出を求められた。注意が必要なのは落雷くらいのものでらうとタカを括っていたら、三角頭のチャイニーズ・コブラまで歓迎に現れたので、なるほど保護区なんだと納得した。

陳さんは香港の中国返還をまえに香港を出て日本に来たらしい。日本国内では私らとなかなか交流の機会はないが、いずれ昔話を肴に一緒に飲みたいものだ。



今年の2月中旬から4月までおよそ2カ月半に渡って、とある現場に常駐していました。そこではK建設と言う国内最大手ゼネコンと一緒にあっての工事だったので、かなりナンギで特に安全管理がかなり厳しくてなかなか思うようには仕事させて貰えなかった。あちらとすればこの現場で事故やケガ等起こさない、と言う確固たる信念の元、作業員に厳しく接しているのでしょうが、我々別途業者には特に厳しく当たって来られたようにも感じます。(この原稿があちらに読まれないように願っています。)ただそこで感心させられた事もあって、それをここで書いてみます。

現場では脚立は使うな、と言われます。高い場所での作業は高所作業車が立ち馬を使いなさいという事です。ただ立ち馬等が入らない狭い所が出て来るわけで、そこでは特別許可を頂きます。当然ヘルメット、安全帯着用になります。1.8m以上では必ず着用になるからです。我々とすれば、ここで落ちたりしないよとか、落ちててもこれ位の高さならケガしないだろう、なんでそんなに厳しく言われるかな〜って思ってしまう。またダンプやらブルやら重機が動いている傍には寄るな。と言われるけど、そんなのこっちだって怖いから近くになんか行かないよ、と思う。普通に考え普通に行動していれば事故なんか起きないし、自分は大丈夫と考えるからです。

でも現場には普通の体調の方ばかりが来るとは限りません。昨日飲み過ぎたとか、最近体調不良だとか。また自分では気付かなくても生活習慣病で高血圧、動脈硬化、脳梗塞などの一歩手前の人とか、およそ不健康な人達も集まって来る。そんな不健康な人が高いところで目眩を起こしたらそこで踏ん張る事も出来ず転落、当然頭を守る動作も出来ず落ちてしまったら、たかだか1.8mでも命を落とすことになる。だからヘルメット、安全帯を付けろと言われる。また重機の傍で急に意識を失って倒れてしまってもオペレータが気付かず轢いてしまう事になる。なので不用意に近づくなと言われる。安全に気を使い過ぎという事はないと教えられました。不健康な私には身につまされる思いでした。ついつい自分には関係ない事とか自分は大丈夫とか思いがちですが、そんな思い込みや自信が何処から来るのか。常日頃気遣いを行う事が、安全にも良い仕事にも繋がって来ると再認識させられた次第です。



## ■【テニス中心の人生】

技術営業部 課長 吉田 季史

気付けばもう20年以上テニスをしています。

「なんでテニス始めたんだっけ?」と思い返すと高校1年生の時、友人Y君に「テニススクールいっしょに行こうよ。1年間だけでいいから。」と誘われたのが始まりでした。決して裕福とはいえない家庭で育った私です。子供心に私立高校通いつつテニススクールに行くのは親の経済的負担もさぞかし大きろうと思いましたがテニスはやってみよう。結局両親の理解、協力で1年間テニススクールに通い、それがきっかけで大学生、社会人になってからもテニスを続けております。

気付けば私の周りはテニスを通じて知り合った友人ばかりです。練習、試合では心・技・体の大切さを学び、勝つことで達成感も経験しました。テニスをしていなかったら今頃どんな生活を送っているのだろうと想像しようとしてもできないくらい大きな岐路だったのだと思います。

あの時テニスを始めて良かった。Y君、両親、わがままを押し通した当時の自分に感謝です。



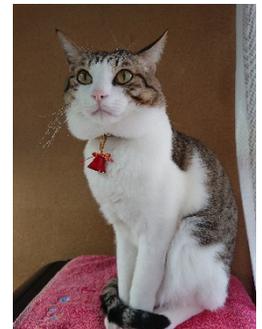
## ■【「猫との生活」～猫もそれぞれ個性的～】

総務部 主任 川勝 麻子

我が家には猫が2匹居ます。1匹は「シヴァ」雄猫。

現在3歳(人間年齢28歳程)。キジトラ白猫で性格は人懐っこく、大きな音でゴロゴロ鳴き、子猫の頃は私の肩までよじ登って来ましたが、現在の体重は5キロと重く、よじ登れなくなった代わりに私の足を支えに背伸び(登ったつもり?)をします。

もう1匹は「パール」雌猫。現在2歳(人間年齢23歳程)。サバトラ白猫で性格は人見知りをし、警戒心強く慣れた所では暴れん坊。日々の行動では、シヴァは次女のボディガード役…とでも言いますか、とにかく彼女の行くところどこでもくっついて行く。小走りに次女が部屋を出るとシヴァも慌てて追いかける。次女が部屋を出入りし、戸を閉めると後ろに付いていたシヴァが締め出される…見ていてほんとうにボディガードなのです(笑)パールはというと、臆病なのに慣れた部屋では大暴れ(女の子ですけど…)。お気に入りの小さな魚のぬいぐるみを投げると持ってくる、という唯一の特技(?)があります(笑)。日々楽しい!



ゴキとはもちろんあの黒か茶色の平べったい虫。15年前から住んでいるアパートは、部屋の気密性が高く隙間が無いため、玄関ドアの開閉時以外では虫は入ってこない。そのおかげでゴキを見ないで過ごしてきたが、ついに姿を現した。待ち焦がれていた訳ではないが。



1 回目は去年の夏の夜。玄関で靴を脱ぎ洗面所（兼脱衣所で奥は浴室）に入って明かりを付けたら、後を追ってきたかのように1匹のゴキが飛んできて洗面所の白壁にとまった。すぐに洗面所のドアを閉め（ゴキの逃亡阻止）、洗面台の中から殺虫スプレーを取り出していざ勝負。スプレーの一撃で壁から落ちたゴキが洗濯乾燥機の下に逃げ込もうとしたが、とどめのスプレーでダウン。大物を仕留めたけど去年はこの1回限り。



2 回目は今年の5月のある夜の事。洗面所で歯磨きするためにリビングキッチンを出ようとした時、食器棚の上の白壁にゴキを見つけた。すぐにドアを閉めスプレーの狙いを付ける。リビングキッチンは家具が多いので家具の裏側に逃げられたら厄介だ。ここで確実に仕留めてやると思いながら噴射。狙いは正確でゴキは食器棚の上に落ちた。もがいているゴキをキッチンペーパーでしっかり包み、シンク横の密閉式ごみ箱にポイ。翌朝「燃えるごみ」として焼却場行き。このゴキはいつどこから入ったのかは不明。

今年は5月に出てくるとは早い。もしかすると居付いている可能性もあるので、誘引殺虫剤を家具・棚の下や裏に置いて様子を見ることにした。畏を仕掛けていくようでわくわくしてしまう。今度はゴキを相手に頭脳戦・心理戦で勝負だ。



## ◆ちょっと豆知識◆その36 「はしか その2」

技術営業部 部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

2015.04 月号の小欄で、「はしか」について書きました。

「グルコース濃度」「カブロン酸エチル濃度」「スパークリング製品の炭酸ガスの強さ」を例に挙げ、人間は刺激の強いものを求め、その後揺り戻しであるところに落ち着く、みんな迎える道であることのメタファーとして「はしか」というタイトルを選択しました。

文中、グルコース濃度と炭酸ガスの強さについては、自身の経験も踏まえ実際の例として書きました。しかし、カブロン酸エチルについては、「こちらもいずれ適切なおところに落ち着くのだと思います。」と締めくくっていたことから分かるように、当時はまだ「揺り戻す」気配がまるで感じられませんでした。

先日、取引先のある製造責任者の方から興味深いお話を聞きましたのでご紹介したいと思います。

ついこの間のことですが、某酒販店が主催した清酒の大きなコンペの結果が発表になりました。毎年出品点数、場数とも増えているようで、マーケットに与える影響も大きくなっていると聞いています。

出品した製造場には、出品されたお酒を実際にきく機会が与えられるとのことで、件の製造責任者の方もお酒をきいてきて、その感想をお聞かせ下さいました。

曰く、カプー辺倒の酒が大きく減ったように思う、カプ+酔イソが大きく増え、殊にどちらかと言うと酔イソ優位の酒が多かったように感じた、とのことでした。

かつて小欄に書いたのは、「その『強度は』揺り戻す」ということであって、「構成成分の比率」については論じていません。これはどう解釈すればよいのか…。

全くの私見なので、誤りがあれば是非ご指摘いただきたいと思うのですが、「酔イソとカプエチでは、清酒に一般的に含まれる濃度域では、カプエチの方が刺激が強い」ということではないかと考えました。

過度な刺激、特に臭気に関しては長時間さらされると気分が悪くなるという人が居ます。

「カプエチ苦手」という方は結構業界に居ますが、「酔イソ苦手」という方にはお会いしたことがありません。「カブロン酸」の語源が「ヤギ」ということもあって、濃度や強度に関係なく、「ヤギ臭くて生理的にダメ」という方に数人お会いしたことがあります。刺激強度が強いが故に苦手、というのも成り立つのではないかと…。

そう考えると、ある清酒のコンペにおいてカプカプした酒が減少傾向に転じたというのも「揺り戻し」として解釈できるのかな、と考えた次第です。

もちろん、「単なる流行の変遷」である可能性も否定できませんが…。

